

小砂丘忠義の綴方教育における諸概念

－E. レヴィナスを参照して－

飯田和明（宇都宮大学）

1. 課題の設定

生活綴方の始祖と言われる小砂丘忠義（1897～1937）は、高知県での小学校教師時代を経て上京し、雑誌『教育の世紀』の編集に関わり、さらに『綴方生活』誌とその子雑誌『鑑賞文選』『綴方読本』の中心的役割を果たすことにより、昭和戦前期の日本の教育に大きな足跡を残した。小砂丘研究は、中内敏夫や川口幸宏、太郎良信等によって本格的に着手され、関係史料の整備と共に研究が進展し、その価値が確認されている。しかし、小砂丘の教育思想についての研究は、未だ十分な展開を見せていないと思われる。それは、小砂丘の関係者や研究者が指摘する、彼のとらえどころのなさや、通常理解を超える一面があることが関係しているだろう。研究の第一人者と言える中内敏夫は、その中心概念を「原始子供」と措定し、独自の教育史研究の内に位置付けた。発表者はこれまでに、小砂丘の「自己」「他者」概念に着目して研究を行ってきた。その中で、小砂丘における諸概念を、エマヌエル・レヴィナスの思想と関連させることが、小砂丘研究を進めることにつながるのではないかという見方を持つに至っている。本発表では、これまで誰かとの直接の比較を通して論じられることのなかった小砂丘の綴方教育を、レヴィナスを参照することによって検討し、そこに新たな教育研究の視角を示唆しようと試みるものである。

2. 生活綴方における言語行為と小砂丘忠義

ものやこと、思ったことや感じたこと、心が動いたことを、子供が言葉を用いて適切に位置付けるという生活綴方における言語行為は、言葉という本質的不備を持つもの（小砂丘）を通して、子供が自身の自己を定位しようとする営みにつながっていたと見られる。その本質的不備を、言語の「他性」として捉えることで、文章技術の指導と、文章を通じた生活の指導を矛盾させることなく実現することができたと考えられるのである。生活綴方において、これら二つの言語活動は分割・対立されずに実践され、綴方を書くという具体的な行為を通して、広く着実な言語教育として機能していたと見ることができる。生活綴方の基礎を築いていった重要な人物の一人である小砂丘忠義の思想の中には、「自己」と「他者」との「分離」が確認される。小砂丘においては、自己を持つとは他者を見ることであり、それは自己とは分離された他者の存在を認めることである。そしてその他者を、改めて自己の内に受容することが、新たな創造を生む。この綴方教育における基本構造が、彼が当時の日本の教育界の中心に持ちこんだものの内実であったと考えられる。また、この他者概念は人に対してだけでなく、人間が日常に扱う言語にも向けられていた。小砂丘の綴方教育における総合的な検討によって、小砂丘の持っていた教育思想として「相対的

自立性)、「眼に見えぬ物へのまなざし」といったエートスを析出することができる。なお、これらの概念は、レヴィナスによって提示された「全体性」に絡め取られることのない「無限」への志向に通じる思想と関連させて、考察を進められる可能性を持つものと考えられる。

3. 「自己」「他者」と「言語」の課題

小砂丘研究において発表者が用いる「自己」「他者」概念は、高知での教師時代の小砂丘の大きな変化を示す事実(綴方指導を中心とした爆発的とも言える活動の開始期であり、「初めて教師になられた」と自ら言葉にする時期でもあった)に着目した考察に発している。それは、「教育が外からゆくべきものではなく、内から外へ外へと、伸び上がる筈のものだといふことに気づいたのである」という小砂丘の言辭を検討することから、教師が生徒の「自己」をはっきりと認識し、生徒の「自己」が、教師の「自己」にとって「他者」として立ち現れてくる事情を説明する議論として展開されている。また、これら二つの概念の検討に関わって、小砂丘とレヴィナスに近似の様相があることが指摘されている。さらに、小砂丘研究において課題として残されている「小砂丘の言語に対する不審」に発して、小砂丘の考える言語というものが、レヴィナスの述べる「ことば(ランガージュ)」に近いものではないかとして、新たな検討の可能性が示唆されている。本発表では、これら個別に提示された内容について、小砂丘研究における諸概念を、関連すると思われるレヴィナスの言説との比較を通して検討しながら、段を取って議論を進めていく。

4. 小砂丘における教育思想とレヴィナスの言説

「自己をもつとは、自己を認めると同程度に他をはつきり見てゐる相である。多くの個の列ぶ中に立つ自己を見ることである。それをはつきり見て始めて全的のものはいひ方、見方が出来るものである。胸をひろげて『お、友よ』と話しかける心持、一本の草によびかけてしみじみ心の底をはたいてしまふ心持は最も安定な自己を見てゐる時である。『自分の物』にしようとする欲求も極めて自然である。自分の物にすることによって私は又その物に私自身をなげ出してゐる。」「自己を持たぬ所に静けさはない。静けさのない生涯はゆきつまつて動きがとれなくなり、光が薄くて暗が大きくみえ、希望が失われて不満が多くなり、其日其日が其日で終つて、永遠への連続がなくなるだらう。私の静けさは、私を一人にすることで又他を私にし、私を他にしてゆく所にある。」本発表では、この「眠らぬ寝床」(1926.4)にある小砂丘の文言を契機として、『全体性と無限』を初めとするレヴィナスの著作中の言説と合わせて検討し、解釈を施す。また、本研究で議論される書くことの教育に関する言語活動が、現代においてどのような意味を持つものなのかについて、さらに、小砂丘忠義という人物に関わる研究に、エマヌエル・レヴィナスの思想を絡めた考察を展開することが、現代の教育を考えるに当たって参照しうるどのような議論につながっていくのかについて示唆する。